

みんなが幸せの一瞬を感じる
夢を作り続けたい



ゲスト

石井 竜也氏

アーティスト／近代製鉄発祥150周年記念事業 広報大使

プロフィール●いしい・たつや

1959年生まれ。85年、米米CLUBとしてデビュー。楽曲の作詞・作曲、ステージセット、コスチュームなど総合的にステージをプロデュースする。92年、シングル「君がいるだけで」で日本レコード大賞受賞。多くのヒット曲をリリースするかたわら、映画監督としても活動の場を広げ、94年『河童』、96年『ACRI』を公開。97年の米米CLUB解散後(06年再始動)、ソロ活動開始。音楽活動に加えて「大阪HEP FIVE(商業ビル)」空間プロデュースや「鈴鹿8時間耐久レース」の総合プロデュース、05年には愛知万博「愛・地球博」レギュラープログラムの総合プロデューサーを務める。アート作品の展覧会として、97年「空想美術館」、99年「昇展」、02年「NUDE」、06年「VenusWhite」を開催、08年には古来より伝わる「だるま」を用いて制作した「顔魂～KAODAMA～」を森アーツセンターギャラリーにて開催し、成功を収めた。さらにテレビやラジオのパーソナリティも務めるなど、多方面にわたって才能を発揮。インダストリアル・デザイナーとしても数多くのデザインを手がける。近代製鉄発祥150周年記念事業では、広報大使として、シンボルキャラクター「AIRA」のデザインや、イメージソングの作詞・作曲を担当。

絵の具のにおいの中で 育った子ども時代

——石井さんは、アーティストとして多方面で活躍していらっしゃいますが、その原点を教えてください。

僕は茨城県の五浦という福島県との県境にある小さな港町で育ちました。そこは横山大観や石井柏亭といった近代日本画の確立に尽力した芸術家たちが居を構え活動拠点としたところで、絵画に対して開かれた土地柄でした。僕の家系は絵心のある人が多かったようで、祖父や親父も絵を描いたりしていました。親戚にも美大出身者が何人もいましたね。僕もおもちゃを買ってもらったり、画用紙や油粘土を買ってもらって喜んでいるような子どもでした。

5歳のころ、親父が経営していたアパートにただで絵描きの先生を住まわせて、代わりに「息子に絵を教えてください」と頼んで、その先生の手解きを受けることになりました。実家は和菓子屋でしたが、砂糖やお菓子のにおいより、テレピン油や油絵の具のにおいで育ったようなものです。だから、自分は絶対に芸大に行くんだと必死になって絵を描いていました。地元の港町の子どもたちは学校から帰るとランドセルを放り投げて野球をしたり、冬でも泳いだりと活発でしたが、僕は絵ばかり描いて引きこもっていて、なんとなくこの町は居づらいな、自分は周囲と考えていることが違うのかなと感じていました。高校になると、絵の勉強のために水戸まで鈍行列車で1時間半くらいかけて通っていました。ところが、芸大を受けたのですが見事に落ちてしまいました。一浪しても芸大に行きたかったのですが、父から「世界中の絵描きを見てみる、みんな人に教わったものではなく、自分の感性で一流になっている」と言われ、あきらめました。何年も経ったある日、父にあのときなぜ一浪させてくれなかったかと聞いたら、単にお金がかかると(笑)。

——上京してから、音楽の道に進まれました。

文化学院に通い始めたんですが、自分と似たような変わり者がいっぱいいて、自由な発想でいいんだとほっとしたのを覚えています。米米CLUBのメンバーとも、ここで知り合いました。

当時パンクが流行していましたが、どちらかというと、音楽に対してはアイロニカルに見ていました。何が「愛してる」だよって(笑)。面白半分には音楽イベントに出かけては、観客がこぶしを挙げて「イエーッ」とやっているのを笑っていたりして。米米CLUBも音楽をちょっと斜めに見て皮肉ったところから始めたので、こんなに長くステージを続けて、まして音楽番組の司会をやるなんて、思ってもみませんでした(笑)。



——音楽活動では、歌だけではなくステージ全体をプロデュースされていますね。

僕は歌だけでなく、ステージデザイン、ファッション、キャラクターなど舞台上のすべてを、総合的にエンターテインメントとして表現すべきだと思っているんです。歌だけ、音楽だけだったらクラシックの方が“本物”です。その音楽に合ったセット、ファッションなどが相乗効果を上げて高め合うことで、一つのイメージを作り上げ、一枚の絵のようになる。例えばつくられた舞台にポッと出て行くのは苦手なんです。毎回皆を驚かせるために考え抜く“自作自演”。難しさも感じますが、やりがいがあります。

孤独と向き合い、悩み抜くことで 壁は乗り越えられる

——ステージのたびに相当エネルギーを使われると思いますが、そのパワーはどこから生まれるのでしょうか。

最初のころは、自分がやりたいことを生み出すつもりでやっていましたが、余裕が出てくると、観ている人たちの表情が次第にキラキラと輝いてくるのがわかったんです。そんな表情が見たくてステージに向かっていますね。絵描きは自分の作品を見ている人の表情を見ることは難しいと思いますが、ステージというキャンバスを持っていると、その場で観ている人の反応がわかる。しかも絵の中に自分を入れる。これはすごいことだと思います。

——一方で、最近の「顔魂」に代表されるように、ステージとは異なる分野で作品を作っています。

コンサートは何万人という観客に向けた、開かれた



「顔魂」制作の様子

世界ですが、一方で自分の内面に向けたエネルギーも蓄えないといけないと思っています。ちょっと腹が減るんですね。そのためにアートの感覚的な部分を養い、自分の腕を動かし、鍛えないといけないんです。コンサートをやればやるほど、自分で手足を動かして作りたいという欲求が出てきます。

それが一つの形になったものが顔魂です。コンサートが終わってへとへとになって帰ってきてから、水一杯も飲まず、絵付け前のだるまに粘土をくっつけていく。そうすると不思議と癒されていくんですね。出来上がった顔魂一つひとつは、笑っているのに険しい表情を見せたり、泣いているようでもおおらかだったり、表情の向こう側に、僕の精神状態が浮かび上がってきます。最初はデッサンを描いてから作っていましたが、それでは計画以上のものは出来上がらないので、粘土をぶつけてそのまま作り始めるようになりました。ステージ上で歌い動くことも好きだけど、顔魂に取り組んでみて、僕は自分の指を動かしてものを作ることに喜びを見出す人間なんだと改めて感じました。ビジネスマンにとってのゴルフのような(笑)、自分を発散するものですね。

—— 悩んだり、壁にぶつかった場合は、どのように乗り越えてこられたのでしょうか？

悩んだときは、徹底的に自分と向き合うことにしています。まずは一人の時間を確保する努力をしますね。家族と離れ、ホテルに引きこもることもあります。人に相談することもあります。最終的に解決するのは自分自身。最近、携帯電話の登録人数や四六時中メールでつながることを「友情」と感じ、孤独を紛らわせる人が多いようですが、それは違うと思います。僕は携帯電話を持っていません。携帯電話に縛られるような、必要以上の人間関係はいらないし、会話するなら直接

会って目と目を合わせたほうがいい。本来、人は誰しも孤独なんです。それを受け入れ、一人に耐えられることが必要だと思います。チームで仕事をしていても、結局、一人ひとりが何をやるかでチームが成り立っている。一人であることや孤独を大切にしないと、逆にチームワークもうまくいかなくなると思います。

一人になったら、鉛筆を1本使い切るほど、がむしゃらに描いて自分が納得するまで悩み抜きます。壁にぶち当たったときほど、そうしたほうがいい。そういうことでしか乗り越えられないと思います。

やわらかい鉄を表現した シンボルキャラクター「AIRA」

—— 近代製鉄発祥150周年記念事業の広報大使をお願いしています。日本の鉄鋼業について、どのような印象をお持ちですか。

広報大使の話をしていただき、大変光栄でしたし、僕が今考えていることを表現できる場面が多いのではないかとと思っています。

日本の鉄鋼業は、地球上の大切な資源を用いて鉄を生産する、日本という国を支える産業の一つ。そうした産業が確固としたフィロソフィーを持ってこの国に存在し、今後とも世界にそのあり方を示してほしいと思います。150年の長きにわたって日本を支えてきた鉄鋼業ですから、広報大使を引き受けるに当たっては中途半端なことではできないと悩みました。ただ、よく鉄はかたいイメージを持たれますが、造形に携わり、ジュエリーにも興味がある僕から見れば、鉄はどんな形にもなるし、どんな素材と



鉄のシンボルキャラクター「AIRA」



も適応できる幅の広さを持つ、やわらかいイメージがあります。かたいロボットのようなイメージより、もっと人間的。鉄は人間の生活になくてはならないもので、「鉄は熱いうちに打て」といった言葉が生まれているくらい、人間の精神性にも深くかかわっている。そうした部分を大事にして考えたキャラクターが「AIRA」です。

——鉄のシンボルキャラクターが女の子というのが新鮮でした。

昔から、世界各地で人間は生活に鉄を取り入れ、いろいろなものを生み出してきましたし、最近鉄で作られているものは、四角張ったものより曲線のほうが多いように感じます。これは、女性のイメージだと思ったんです。ただセクシーな女の子だと秋葉原で売れるだけになってしまうので(笑)、これから大人になる無垢な少女が新しい命を生むというイメージで作りました。顔を見てもらうとわかりますが、落ち着いて、平穏な雰囲気です。そして鉄の長い歴史観を取り入れられないかと考え、こういう民族衣装のような服を着せてみました。

——7月に行われるイベント「鉄の星フェスティバル」(※)で、鉄鋼ソングも披露していただきます。

『AIRAの大地』という曲を考えています。鉄は大地から掘り出され、錆びてまた大地に戻る。水や空気と同様、循環できる素材です。人工物のように作っているけれど、実は自然のものですよね。僕たちは野菜や果物と同じように、大地から鉄という資源をもらっているということを歌詞に込めています。

日本の鉄鋼業は地球温暖化問題に熱心に取り組み、循環型の仕組みを作り出している点も、立派だと感じるし、世界に誇れるものだと思っています。そうした点も嫌味なく歌の中に取り入れたいと考えています。

※ 詳しくは、P9、10をご覧ください。

——近代製鉄発祥150周年記念事業では、一般の方々に鉄に親しみを持ってもらいたいと考えていますが、どうしたらうまく伝わるでしょうか。

それがわかったら、僕もどこかの社長になっているでしょうけど(笑)、どうしても今までの鉄鋼業は巨大で、遠い存在だったような気がします。それをもっと近い存在に感じてもらい、いろんな人が鉄を通してさまざまなものを作り出す道につながればいいと思います。僕がそうした役割の一端を担えるといいなと思います。僕がそうした役割の一端を担えるといいなと思いつつ曲も作っています。ぼかぼかした陽気の中をゆっくり歩いているような、結構のんびりとした、のんきな感じの曲なんです。

——アーティストとして訴えていきたいことを教えてください。

僕はいつも自分の夢を作っているのですが、それが人の夢につながったり、人に夢を見てもらえるようなものにならなければいけないという責任を感じています。僕たちの歌を聴いた人が幸せを感じて、ほんの一瞬でもほんわかした気持ちになったり、笑える一瞬を作るために、自分は存在しているのかもしれないと思います。偉そうに何かを発信しようなどとは思っていませんが、世界が平和であってほしいと、いつも考えています。

よく活動が多岐にわたると言われますが、僕としては違うことをやっている感じはあまりないんです。サッカー選手が絵も描いて経理もやったらすごいんですけど(笑)、僕がやっていることは何かをつくり表現すること。今回なら、鉄鋼業というヒントをいただいて、自分がアーティストとして創造・発信できるものは何かを考えています。

——最後に読者へメッセージをいただけますか。

鉄鋼業界にかかわる皆さんには、子どもたちに、「お父さんやお母さんがやっていることは未来をつくる素晴らしい仕事で、あなたたちのために鉄をどのように活用したらいいかを毎日一生懸命考えているんだよ」ということをぜひ伝えてあげてほしいですね。

